

あん ぎょうはら じゃ づく 安行原の蛇造り

川口市の東部、植木業が盛んな安行地域の中にある安行原では、毎年5月24日に藁で蛇(「じゃ」と呼ばれています)を造り、悪疫退散や五穀豊穰を祈る行事「安行原の蛇造り」が行なわれています。言い伝えによれば江戸時代中期に始まり、大正時代に一時中止したところ赤痢が流行したため、その後は戦時中でも欠かさず続けられてきました。

造られる蛇は長さ約10メートル、重さ約200キログラムもの巨大なもので、これを安行原の「ジガケ」と呼ばれる場所にある御神木のケヤキにかけ、専用の台に頭部を乗せて一年間安置します。以前は手前の樹齢600年とも言われるケヤキにかけていましたが、弱ってきたため現在は二世のケヤキにかけています。しかし、二世のケヤキはまだ蛇の頭を支えられないため、専用の台を設けています。

安行原は6つの字に分かれていますが、「安行原の蛇造り」はそのうち中郷・半縄・小清水・向原の4つの字の人々によって行なわれてきました。現在はこれらの人々を中心とした「安行原蛇造り保存会」によって受け継がれています。「世話人」と呼ばれる方が中心となり、また、一年交代の「年番」が蛇造りの資金となる「御神酒銭」集めや、下準備などをします。